

次世代有機ELパネル共同開発

レアメタル不要に

日立製作所、東芝、ソニーなどの中小型パネル事業の統合会社、ジャパニディスプレイ(東京・港区)は、九州大学や福岡県が進める次世代の有機

EL(エレクトロルミネッセンス)パネルの開発に参加する。レアメタル(希少金属)を使わずコストを抑えた材料を活用。スマートフォン(高機能携帯電話)やスマートフォンなどに向けに2015年度以降の量産を目指す。九大などが10年に設立した最先端有機光エレクトロニクス研究センター

ンディスプレイ
ディスプレイ

(福岡市)で取り組む研究に参画する。同センターにはパナソニックや富士フイルムなども参加し、材料や素材で九大と個別に研究開発を進めている。

DFと呼ばれる発光材料を使ったパネルを開発する。TADFはレアメタルを原料とする「リン光材料」に比べ製造コストが約10分の1と安いのが特長という。

申請している。今後はリン光材料に比べて劣っていない発光効率の引き上げを図るほか、中小型パネルにする際の耐久性やコストを評価する。

ジャパニディスプレイなどは、レアメタルの一種であるイリジウムや白金などがいらぬ「TADF」材料は九大の安達千波矢教授らが、分子構造を工夫するなどして昨年開発に成功。現在、特許を

の有機ELパネルは韓国サムスン電子グループが世界シェアの8割を握る。